

湛睿の唱導資料にみる説草をめぐって

田 中 徳 定

はじめに

仏教法会において、僧たちは説教の手控えとして小型の冊子を懐中に携行した。それが説草と呼ばれるものである。説草を中心とした唱導と中世文学の関わりについては、はやく永井義憲氏が、仏教説話集の編纂成立は唱導を前提として考えなければ理解できないこと、軍記文学の文体形成に大きな影響を与えたこと、軍記の中に語られるインド・中国の説話は、すでに唱導を通じて周知のものとなっており、それらを前提として軍記の中に織り込まれ受容されたことを論じておられる。¹⁾ また、説草が中世文学に与えた影響については、岡見正雄氏が、説草「鹿野苑物語」について、軍記の表現との類似性を指摘され、また、唱導の場で盛んに因縁譚が語られていたことが『因縁集』や『私聚百因縁集』という説話集が編集されることになったことを論じておられる。また説草「多田満仲」に、幸若舞曲「満仲」と共通詞句が見られることから、説草「多田満仲」が幸若舞曲「満仲」、謡曲「仲光（満仲）」のもとであること、中

世小説の類が唱導の場を経過してきた場合があったことを論じておられる。⁽²⁾

説草は、中世の文学や芸能を培う土壌となったと考えられるのであるが、説草は、本来人々の信仰、それも現実の生活における信仰や生活思想と深く関わるものであったと考えられる。人々は、説教の法話を通して仏教の知識を得、また説教を聞いた感動から信仰へと赴くこともあったであろうと推測される。中世を代表する唱導の一派であった安居院流の唱導資料からは、様々な法会において説教が行われていたことが推測されるが、説教の手控えであった説草は、実際の法会で使用することをその目的としていたため、多くの法会で使用されたうえに、さらに現在まで残っている説草となると、その数は極めて少ない。それでも、近年いくつもの説草が翻刻され、あるいはその影印が紹介されている。⁽³⁾ そのような説草の中で、納富常天氏によって翻刻紹介された、金沢文庫所蔵の湛齋の唱導資料は、多くの説草を含んでおり、中世における信仰の有り様や説草と文字との関わりを考えるうえできわめて重要な資料である。

湛齋の生涯とその事績については、納富氏による詳細な研究があるが、⁽⁵⁾ 湛齋（一二七一～一三四七）は、東大寺の凝然に従って華嚴を究め、律・浄土などの諸宗を学んだ後、関東に下向し、金澤称名寺開山の審海に就いて密乗を学んだ僧である。湛齋は、金澤実時が称名寺に文庫を設立するに際して、審海、劍阿を助け、広く聖教類の蒐集ならびに書写に尽くしたことで知られている。納富氏によれば、「湛齋における唱導は弁曉・凝然から南都流を、劔阿から安居院流および南都流をつけている」⁽⁶⁾ が、「残存する湛齋の唱導資料中に、安居院唱導資料から直接影響をつけたものは殆どみられない」ということである。⁽⁶⁾ 納富氏は、一九六六のぼる唱導資料を紹介され、内容や使用目的によって、次の三項目に大別された。

(A) 仏事法会関係（八〇部）

(B) 仏事法会と追善供養(逆修も含む) に使用したもの(一〇部)

(C) 追善供養(逆修も含む) に使用したもの(一〇六部)

湛齋の唱導資料は、使用された年月、場所、法会の種類が覚え書きとして記されている場合が多く、実際の唱導の場において、説教僧が人々にどのような教義や法話を語っていたのかを如実に知ることができる貴重な資料である。信仰の場における僧と人々との、まさに接点となっていた資料であり、当時の人々の生活における信仰のありようを生き生きと今に伝える資料なのである。

以前、孝思想の観点から、追善供養法会において使用された説草から、亡親追善供養法会は孝思想を基盤として営まれていたこと、追善供養は亡き親への死後の孝行であり、仏教的観点から追善供養が真の孝行であると説かれていたこと、また、亡親追善供養法会の説教においては、親の恩を讃え、法会を営む施主の孝を讃えるため、親子の恩愛物語が語られていたことを述べた。⁷⁾ ところで、納富氏が「仏事法会関係」に分類されている説草にも、親子の恩愛物語を「因縁」として説く説草がある。そこで、本稿においては、亡親追善供養法会以外の法会において使用された説草について、孝思想との関わりから考えてみる。また併せて中世の文学や芸能との関わりについても考察する。

一、涅槃会に使用された説草

納富氏は、前述したように、湛齋の唱導資料を大きく三つに分類されたが、それぞれの分類の中を、さらにその内容や使用目的によって細かく分類されている。「A) 仏事法会関係」に分類された唱導資料については、「(一) 仏・

菩薩の讚歎に関するもの」「二」教典の注釈に関するもの」「三」教義に関するもの」「四」密教修法に関するもの」「五」写経関係のもの」「六」布薩会に関するもの」「七」年始説戒に関するもの」「八」涅槃会に関するもの」「九」彼岸会に関するもの」「十」仏名会に関するもの」「十一」千部経に関するもの」「十二」その他」に分類されている。これらの資料の中には、いくつもの説話を見いだすことができ、黒田彰氏によって、『孝行集』、『私聚百因縁集』、小林文庫本『百因縁集』との同類話が含まれていること、説話集と説草との往還関係を考えるべきことが指摘されている。⁽⁸⁾ また、黒田氏が指摘された説話集以外にも、『直談因縁集』との同類話を見いだすことができる（後述）。おそらく、説草と説話集、また教典の注釈は、直線的な影響関係ではなく、それぞれが互いに影響し合っていたものと考えられる。また、永井義憲氏や岡見正雄氏が提言されたことく、唱導の場で多くの聴衆を惹きつけた説話は、説話集の中に収録されたであろうこと、さらには、芸能にも取り入れられていったであろうことが考えられるのである。

湛睿の唱導資料に収められている説草に関しては、様々な法会で用いられた説草の中に、親子の恩愛をテーマとした物語を幾つも見いだすことができる点、信仰と文字の両面から注目されるのである。親子の恩愛をテーマとした説草と説話集との関わりについては、すでに、説草「恵心僧都母事」は『三國伝記』巻十二第三「恵心院源信僧都事」の基となったことが考えられており、説草「院源僧正事」は『発心集』巻五第十五話「正算僧都の母、子の為に志深き事」との類似（『内外因縁集』に収載される「正算訪雪」は同話の要旨）が考えられている。⁽⁹⁾ このように、親子の恩愛をテーマとした説草に記される説話が説話集に収録されていたのは、親子の恩愛というテーマが、聴衆の心を捉える話であり、聴衆に好まれた話柄であったことを推測させる。湛睿の唱導資料の中、追善供養法会において使用された説草にみられる親子の恩愛をテーマとした話については拙著で触れたが、その他の法会においても、親子の恩愛

をテーマとした話が語られていたことが確認できる。そこでは、どのような説教が行われていたのか、また、説話集や芸能との関わりを考えることができるかどうかを考察していく。

納富氏が、「涅槃会に関するもの」として分類された資料に、次のような説草がある。

「陵母因縁ノ母思子之志深事ノ女心武事」(粘葉装一五・七×一・七^四、三三四箱)

漢ノ高祖与項羽^{カウウ}相戰。高祖^{ハハ}十萬騎ノ兵ヲ率^イ覇上^ハ城^ヲ。項羽^{ハハ}四十萬騎ノ勢ヲ引^テ鴻門^ニ取陣^ニ。高祖^ニ有^二一人ノ臣下^一一人^ヲ名^ク長良^ト。心賢^ヲ智明^ニ。廻^シ計^ヲ於^レ惟悵^{之中}。施^ス勝^{コト}於^レ千里^{之外}。軍ノ夕^ハ力^ヲ物^ノヲキテ惣^テ無比^ニ者^ト候。今一人^ヲ云^{ハム}焚^{ハム}會^ニ。此^ハ死生不知^ノ兵也。懸^ケ軍^ヲ前^ヲ破^ト敵^ノ陣^ニ無^シ向^ル面^ラ之人^ト。弓馬之勢^ト傳^ヘ家^ニ。勇士^ト之^ハ聞^ヘ遍^シ世^ニ。何^レモ^クユ、シカシ兵候時^ニ高祖^兵ノ中^カテ言^{フル}ハ。戰^ハ已^ニ及^フ度^ニ。勝負可限^ル今^度。但^シ項羽^ハ多勢也、我^ハ無勢也。破^{ラム}敵^ノ陣^ヲ事不可容^カ易^ト。各^何カ、可^キ計^フ云^フ。爰^ニ長良^{進出}テ、申^{サク}戰場^ニ決^{スル}コト雌雄^ヲ、不可依^ル勢^ト多^ク少^ニ。只^以計^ヲ為^先。然^レトモ^ハ彼^ハ四十萬騎^{ナリ}。此^ハ纔^カ二十萬騎也。既^ニ多少懸隔^{ナリ}。實^ニ大陣難^シ破^ト。然^ル王陵^ト兵^{アリ}。計^{コト}賢^ク心武^ク一人當^ク千^ノ兵^{タル}上^ヘ、隨^ヘタリ^メ數千^ノ兵卒^ヲ。彼^ハ參^メ御^方者^{ナラ}ハ。平^ラケム^{コト}逆^徒更^無疑^ト。早^キ被^レ召^レ彼^レ之^由申^ス。爰^ニ高祖^{尤可}ト悦^遣サレ^シ使^シ、王陵^無左右^ニ高祖^ニ奉^リ隨^フ。項羽^聞之^大驚^テ云^ク、高祖^ノ兵^雖少^シ皆^テ計^リコト勝^レ心武^ト。其上^王陵^率數^千騎^ノ軍^兵ヲ既^ニ相^隨之上^ハ今^度被^レ破^陣無^疑ト。此事^ハ。爰^ニ項羽^方范^增項^伯ナムト申^ス兵^ノ共^ノ候^{ケル}力^計申^様、彼^ノ王陵^母ヲ召^籠テ彼^レ被^レ召^サ王陵^ヲ、雖^モ武^キ物^ノ賦^{ナリ}ト母子^ノ恩^愛之情^ハサス力^難捨^テ事^候へハ定^テ可^奉隨^君ト申^ユ。尤^可然^トトテ仍^テ召^取テ陵^母ヲ急^キ使^者遣^サレ^テ王陵^許ニ云^ク。我^レ与^{高祖}戰^{コト}已^ニ送^レ

數年^ヲ。然^レトモ互^ニ無^ク勝負^シ罷過^ル者^ノヲ、汝今引率^シ數千^ノ兵^ヲ奉付^キ高祖^ニ。我^レ於^テ今^ニ者^ニ被破陣^ニ無疑^ニ。是非第一^ノ遺恨^ニ哉。付其^レ者汝^カ母^在此^ニ。若存孝行^ヲ早可^シ來^ル。不^ハ尔^ハ忽^ク可^ク失^ル汝^カ母^ノ命^ヲ云々。爰^ニ母聞^キ此事^ヲ、若我^レ子有^テ翻^{ヘル}心^モコ^ト、食^フ切^テ指^シ書^キ消息^ヲ、竊^{カニ}遣^フ王陵^カ許^ハ狀^云忘^ル親^子恩^愛之^情戰場^ニ捨^テ命^シ是^レ武將^ノ常^ノ習^ト勇士^ノ定^メ心^{ナリ}。我^レ由^テ在^リ此^ニ返^ル馬^鼻者^ナラハ後^代留^メ不^覺名^ヲ、傍^カ部^人謂^フ有^リ二^心。就中^ニ項羽^ハ政^連天^心之^故亡^セムコト命^在近^キニ。高祖^ハ所^行不^合道^ニ。取^{コト}世^ニ無^疑。相^構運^テ深^キ志^ヲ可^ク顯^ル忠^節ノ^色。我^レ縱^ヒ五^躰被^テ摧^カ寸^々ニ身^ヲ被^テ切^ラ段^々ニ、爲^ル汝^カ思^ハ更^ハ不^可爲^痛。若我^レカクテ有^レハ汝^チ有^レト心^弱。思^フ故^ニ、忽^ク捨^テ命^シ也^ト書^キ留^メ即^チ拔^キ劔^ヲ臥^シ其^ノ上^ニ死^シヌ。王陵^披狀^目暗^心迷^テ、只^ク消息^ヲ宛^テ面^ニ悲^涙湿^ル袂^ヲ。母^ノ思^子之^習自古^ニ雖^シ事^舊、正^テ亡^身失^命マテ^ノ事^實。一行^分空^白蒙^求二^陵母^劔臥^ス候^ハ此^候。實^ニ陵^カ母^之言^不落^地。項羽^終負^ケテ戰^ニ亡^シ命^シ。一行^分空^白サテ高祖^打勝^シ之^日王陵^{第一}之^忠臣^宰相^成リ候^候。

(納富常天「湛齋の唱導資料について」(二二)、『鶴見大学紀要』第三十号第四部 人文・社会・自然科学篇、一九九三年三月、181頁。なお、句読点は、論者が適宜補った。以下同じ。)

この説草は、『前漢書』卷四十「王陵傳」に基づく王陵とその母の物語を敷衍し、唱導の語り仕立てていると考えられる。本文の中に「蒙求^ニ陵母劔^ニ臥^ス候^ハ此^候」とあるように、この話は『蒙求』にも、「陵母臥劔」として記される有名な話である。⁽¹¹⁾この説草においては、副題に「母思子之志深事」とあるように、高祖軍に従った王陵を味方に付けるため、項羽が王陵の母を人質に取ったが、母は、自分故に王陵が高祖への忠義に背くことがあつてはならないと自ら命を絶つた出来事を語り、王陵の母の心情に焦点をあてて、子を思つ母の心のありがたさを説いている。

さらに、末尾には「元徳二年二月十五日土橋用之ノ正慶二年二月十五日土ノ康永二年二月十五日金」という覚え書きが記されていることから、この説草は、涅槃会においてしばしば用いられた説草であったことが確認できる。納富氏が紹介された湛誓の唱導資料において、涅槃会に関する説草は、他に一点ある。その説草は、「題未詳」で、虫損・汚損による判読不明箇所が多く、正確にその内容を把握することは困難であるが、おおよそ、諸仏の中で釈尊が最も優れていることを述べ、釈尊への結縁を勧めるものであったと判断される。涅槃会の趣旨からすれば、涅槃会においては、この「題未詳」の説草に語られているような法話がしばしば語られていたと考えられる。実際に、この「題未詳」の説草には、「元應三年〔辛酉〕二月十五日多寶寺用之ノ嘉曆四年二月十五日東禅寺」と覚え書きが記されており、涅槃会の法会の場で繰り返し語られていたことが確認できる。

しかし、「説草「陵母因縁」は、涅槃会において、釈尊の尊さ、ありがたさを説く法話ばかりでなく、それ以外の、例えば母の恩愛を説く法話が語られていたことを教えてくれる。また、「陵母因縁」は、高祖と項羽の戦い、王陵を味方につけるための両者の駆け引き、それによって引き起こされる王陵とその母の悲劇など、単に母の恩愛を説くにとどまらない「物語」としての面白さを備えている。この「陵母因縁」が、講師の巧みな弁舌によって語られていたことを想像すると、聴衆は、例えば講談の話に聞き入るように、この話を楽しんで享受していたのではなかったかと思われる。おそろく、涅槃会は、教化と芸能が一体となった、娯楽の場ではなかったかと思われる。（なお、これらの湛誓の唱導資料が使用された涅槃会とはほぼ同時代の涅槃会において、貴賤老若男女の聴衆が多く参集し、説教を聴聞していた子は、『徒然草』第二百三十八段からうかがうことができる。）

親子の恩愛というテーマは、亡親追善供養法会の唱導の語りの中においては、不可欠の要素であった。例えば、法

会における唱導全般の手控えと思われる『東大寺諷誦文稿』（八百年代前半の成立）収録の亡親追善供養関連の唱導文では、まず親の恩が説かれ、その恩に報いることが孝子による生前の孝養であり死後の孝（追善供養）であると説かれている。また、ある内親王が、自らの後世菩提と、父母（後三条天皇と茂子贈皇后）およびおそらく乳母の追善供養のために営んだ法会における、『法華経』ならびに『阿弥陀経』、『般若心経』の説経の聞書である『法華百座聞書抄』（一一〇年成立か）に記される、三月二十七日の大輔得業覚誓の説経も同様の説き方で語られている。さらに、安居院の唱導と密接に関わる金玉句を類聚したと思われる『金玉要集』（室町末期写）第三に収載される亡母追善供養法会関連の唱導文でも、「悲母事 因縁奈々有之」と記され、母の恩が説かれている。

亡親追善供養法会における唱導において、亡き親の恩を説くことは、追善供養法会が亡き親に対する施主の孝であるからにほかならず、特に施主段の説教においては、親の恩に報いる施主を讃えるためにも、まず親の子への恩を説くことが必要であった。ところが、説草「陵母因縁」からは、母の恩愛物語が、亡母追善供養法会のみならず、涅槃会などの季節の法会においても語られていたことが確認できる。涅槃会においては、釈迦の物語以外にも、聴衆の心を信仰に導くための様々な物語が語られていたものと思われる。「陵母因縁」が涅槃会で語られていたことから、仏教において「孝」が人々の信仰と不可分であったこと、また、母の恩愛説話が一般の聴衆に好まれた話柄であったことがうかがわれるのである。

二、彼岸会に使用された説草

湛睿の唱導資料からは、彼岸会の唱導においても、母の恩愛物語が語られていたことが確認できる。次にその説草を掲げる。

「祈テ地蔵ニ癒癩病ヲ事〔眞貴僧都因縁也〕ノ母悲子事」(粘葉装一三・七×二三・五cm、三〇八箱)

興福寺喜多院ノ眞貴僧正ハ伊賀國人也。幼少時、佛法繁昌ノ靈地興福寺差上ス宿因令然ラ、喜多院空靜僧都ノ弟子ト成ル。心操尋常ノ学問ノ勲ニ候間、僧都モ哀思テ殊ニ情ケヲ至ス。此小童何ナル宿業ニヤメレ、身ニ受癩病一。然間坊中ノ人々モ皆獸之。隣坊ノ輩悉ク悲之ヲ間、幼稚ノ心底無ク限リ心憂覺ヘケレハ、即行猿澤ノ池ニ投ケントシ身ヲ候ケルニ、古郷ヨリ付タリケル從者ノ童悲ノ餘リ諸ク申ケルハ、主從ノ契今生一世ヲ契ニ非ス。生々世々ノ深始ニ也。此童カ申サンニ隨テ枉テ今一度古郷ヘ返リ、縦雖見クキ惡御質ニ母御前ニ今一度奉リ見ヘ、最後ノ御見參シ候後ニイカニモ成給ヘカト申ケレハ、此兒流淚云、古郷ヘハ錦ノハカマヲ著テ返ルト云ニ、此病ヲ常ノ身ニ行カント人ノ思ハノ事モハツカシ。又母子ニ恩愛ノ中ニ争ウトム心無ク。只不如一捨ニハトテ身ヲ髮ヲ三分マ、一ヲ春日ノ明神ニ進ララス。一ヲ本國ノ氏神ニ進ララス。一ヲ母ノ形見ニ進ラセトテ、ヤカテ髮ヲ切ラントセシ時、此童取付テヲメキサケヒ流淚テ悲ケレハ心ヨハク成テ再隨テ古郷ノ風。夜ノ内出本寺ヲ趣伊賀國ヘ。今ハ限ノ道ヲ春日野景氣モ難見括一、何ノ比返来ラント思フニ晝ノ鐘ノ音モイト哀ニオホヘ、坊中ノ有様野外ノ鹿ノ音名殘惜ク物哀シ。論談ノ聲々留耳底ニ、傍輩人々カケロフ眼前ニ。三笠山ノ月影モ今夜許長目思ニ淚クモリテオホ口ニオホヘ、春日社ノ參詣モ只今許ノ歩ニ思ニ悲ニ切也。漸ク

山モ遠カリ鐘ノ声モ不聞。纔ニ伴フ物トテハヤモメ鳥ノウカレ子觸レテ時ニ催シ哀ヲ碎肝ヲコト云事無シ。泣ク行古郷ニ、母ニ對面。母見之流淚無限。争不悲平。掌声大叫云、我有何ル罪業、唯一子ナルニ令メタル受如此病。汝何ナル不幸ニ力、ル悪報ヲ得ルヤ。悲餘リ年来所持地蔵菩薩ニ向ヒ奉マ、手ヲスリ拳聲ヲ泣ク申ケルハ、我レ聞ク、吾今慇懃付屬汝ハ尺尊ノ遺勅也。地蔵已領受之ヲ給ヒマ。今世後世能引導ハ地蔵ノ悲願也。我レ幾度ヒカ奉シ致歸依。願以慈悲ヲ助、我子ノ病ヲ給ヘ。若定業有テ限、難轉ニ者、願我カ命ニ取リ替ヘ御セ。我已ニ及衰老、設雖存命不久。彼ハ盛年ノ質、病苦平癒セハ、世ニ可久。若今生ノ願望空クハ後生ノ利益トテモ、又不甯。若又ニ聖引攝不叶者、大聖ノ誓ヒ可シト虚空ヲ責申ケレハ、地蔵責メラレテ此ノ道理ニ其夜、ニ告ク小兒ニ云、汝母ハ我檀那、歎ク汝病ヲ事尤理也。我可助汝トテ、以水ヲ洗給フト思ケレハ、病ヲ拭ヒ捨ル様セ候。夢心地ニウレシサ無キ申量ニ問ク、君ハ誰人ソト問フニ、我ハ汝カ母ノ本尊地蔵菩薩也。常ニハ三笠山ニ住セリ。汝テ本寺ニ還テ三會、橋ヲ渡リテ寺務十七年齡七十二ト告給ク。夢覺テ後見其身ヲ本ノ質ヨリモイサキヨク遙ニ勝タリケル間、母子共悦即返本寺ヘ、如思テ遂テ修学ノ業ヲ、別當寺務ニ成リ三三貫主トシ、興法利生云ク。眞實忠算守超平備、四天王ニ列ヒ、是併地蔵菩薩巧方便、母ノ子ヲ悲ム事昔ニ如此。

(納富常天「湛齋の唱導資料について」(二)、『鶴見大学紀要』第三十号第四部 人文・社会・自然科学篇、一九九三年三月、193頁。)

題の割注に「眞實僧都因縁也」とあるように、興福寺の眞實僧正は若い頃身に癩病を受けたが、母が、信仰していた地蔵菩薩に祈り、地蔵菩薩の靈験によって病が平癒した因縁譚である。末尾には「元亨元八彼岸多 用之」と覚え書きが記されており、寺院の彼岸会において用いられた説草であったことが知られる。「多」は「多寶寺」鎌倉扇が谷

にあった忍性を開山とする律宗寺院の略記)。彼岸会においても、涅槃会同様、一般の参詣者が講師の説教を聴聞しようと多く参集したものと思われる。この説話の眼目は、最後に、「地藏菩薩巧方便 母子_ヲ悲_ム事昔_{ヨリ}如此」とあるように、地藏菩薩の靈験を語るとともに子を思つ母の恩愛を語ることにあった。それは、彼岸会に聴聞する、^レありがたいお話として、仏菩薩の靈験譚とともに母の恩愛物語が人々に好まれていたためではなかったかと思われるのである。

なお、本話との類話が、簡略ながら、『直談因縁集』巻六 八「真義僧止、兒_ノ時_ニ業病_ヲ受_テ父母薬師_ニ祈_リ平癒_{スル}事」にある。ただし、『直談因縁集』では、真實僧正が「真義僧正」、生国が「伊勢国」であり、父母が持仏である薬師に祈つて児の病を平癒させた(湛齋の唱導資料では、母が持仏である地藏に祈つて平癒させた)ことなど、細部が異なっている。両話の細部に相違があることから、本筋を同じくする説話が、語られる場や伝承の過程で変容していったことを推測することができよう。いずれにしても、『直談因縁集』には、唱導の場で語られていた説草が影響していることは間違いないものと思われる。

三、その他の法会で使用された説草

同じように、法会において語られていたと思われる親子の恩愛物語を、湛齋の唱導資料から二例あげておく。最初の一例は「悲母因縁」と題する次の説草である。

「悲母因縁 惠咲勤邪見母 今臨終正念事 / 臨終知識事 弥陀念佛事 / 子勤母事」(粘葉装一五・八×三三・一冊、三二四箱)

弥天)道安法師^二有三千人弟子。其中有惠咲比丘^一云者。彼比丘之母儀邪見放逸^テ不弁因果、懈怠無慚^ヲ無信佛法。只明^テ暮^テ自惡業^一外無他^ノ營^ニ。惠咲大^ニ歎常^ハ雖誘^テ之更無用^一。然間此母受重病^一、送数日^ヲ之程^ニ針灸^ニ不叶^テ祈請^ニ不達^セ、有限^ニ業病^テ候^{ケレハ}終^ニ及^テ確^ニ(後欠)

(納富常天「湛譽の唱導資料について」(二)、「鶴見大学紀要」第三十号第四部 人文・社会・自然科学篇、一九九三年三月、225頁)

本資料は断簡であるが、表題と副題および内容から、道安法師の弟子であった惠咲比丘の母は、邪見放逸の無信心者であったが、臨終に際して惠咲比丘が善知識となり、阿弥陀仏を念じさせ、極楽往生させた説話であった、と推測される。納富氏の分類では、「A」仏事法会関係の「其の他」に分類されているが、このような、母と子の恩愛物語が、「悲母因縁」として涅槃会あるいは彼岸会といった、一般の参拝者が参集する法会場で語られていたと推測することができるだろう。

また、題末詳ながら、高僧とその親の恩愛物語も、法会場で語られていたと思われる。そのことを推測させる説草を次に掲げる。

「題末詳(折本装二三・三〇一・五〇、三三五箱)

大和國河井ノ森^ニ一人^ノ貧賤^ヲ渡世^者候^{ケル}ソレカ、或時纔^ニ爲半錢^ノ利^ニ入^テ山^ニ、析薪^ニ負^ヒ背^カニ荷^ヒ肩^ヲニナムトノ
歸家^ニ之時、最苦^ク覺^ク之間、路^ノ頭 本^ニ下^ノ薪^ニ息居^テ信^{連^ツケル}ハ、我由^テ前世^ニ不^レ植^ヘ功德善根^種、今受貧賤孤露
之報^一。渡^ル世^ノ之計^{コト}難^クノ叶^ニ纔^カニ切^テ新^ニ継^ク命^ヲ下賤^ニ之態^ニ勞^ス身^一。今生若如^ク是^ニ遂^ヒ空^ク走^リ過^ル者^ヲ来世^ニ弥^ササコソ

悲カララメト心閑ニ案廻スニ、涙ヲ不關敢ニ數尅悲泣。日既ニ傾カハ西山ニサテシモ可留ル處ナラネハ、負新ヲ築キ杖ヲ趣ク家路ニ之程ニ、最愛ノ男子ヲ一人持テ候。ワレカ生タル貧賤ノ家ニ者、無ク容顏端正ニ生年六歳、終日立門ニ父ヲ待テ居候。ソレカ父見付ル遅シト、アレハ我父歎ト喚鞭ヲ竹馬ニ走來。負薪ノ父カ袖ニ取付最喜テ候。父如何思ヒ候。杖取リ直散々ニ打張此子ヲ候。母驚吾カ子ノ泣ク聲ニ走出テ見ハ、父荒タル氣色ニ無情ニ打擲。間、母取リ障ヲ申ケル様、サレハ汝ハ何物ニ狂ニ歎。汝入シ山之朝、今日常慕テ父立門ニ終日慈テ汝見送山ノ方。我レトク名種喚トモ無リキ内。然今適待得、其心中悦、昵許リノ事、テカハ有ルヘキ。日來ノ恩愛ト云當座事柄ト云、汝モ不思ヒ知哉可有。ソレニ有、何過今如是無情打サイナムソト申泣、取放候。於是父カ申様、サレハトヨ非汝獨子。慈愍之志誰可劣。女ハ智淺、偏悲當時、不知將來。男ハ悟リ深、有遠慮、不哀眼前。我有深所思、打之也。凡ソ父ノ慈ミハ高ク自モ山深シ自リモ海。朝暮ニ守コト之、如眼睛ニ造次ニ翫之似掌ノ玉。彼推燥ケルヲ之誠全ウ不疲三冬之霜ニモ、代命ヲ之志シ殆可被ル千万之兵。夏往冬來、必ス思ヒ衣之厚薄、朝去暮至、又問食之寒温。下若村ノ酒ヲモ不思、獨唱メト、上林苑、菓偏爲、我子。サレハ幼稚無識、未タ弁ハ東西ヲ有、何惡氣忽ニ可打張。但案事ノ情、責念ヲ子ノ之至リ。我身、宿福薄ク、爲折リテ新渡世路ノ樵夫ノ之身ト。此子、爲躰、容顏不惡、心操不咄ナマ。振舞ヲモ令習、尋常ニ奉奉シ可然之方ヘモ、將來成スト人トモ存ク、不馴レ近賤、我身ニハ思フ故無クハ情打テ張也。常上珠以テ無瑕爲喜。吾子ノ心操是穩。誰ノ輩可惡。籠中ノ鶴以テ不疲爲美。吾子ノ形躰不惡。何レ人モ可愛。何況父ノ本慈。深キ争不哀、恩愛ノ之昵、トクトキ連泣、申ス間、母聞之、実ニ理リナル間、共ニ押涙ヲ濕袖。數刻シテ歸リ家ニ入内候。サテ如是養育、已ニ成ル九歳ニ比、本ヨリノ所存カウテ可終。東大寺ニ上司申所ニ無ク申付ルトモ、誰ニ口捨テ置テ僧坊ノ邊ニ罷リ歸候。於是有一人僧見付テ之、形躰事柄不惡、見候之間取テ之童

部ニ召仕之。此ノ小童宿習令然、不トモ假人ノ勸頻ニ近キ馴レ学窓ニ利根聡敏ニ習ヒ俱舍ノ頌ヲ誦經論ノ要文ニ之間、サテハトテ此ノ僧深ク憐止メシメ宮仕ラ今ハ偏ニ勸ニ学問マ、凡ソ聞一ヲ悟十ヲ上性無キ雙機用之仁ニテ候シ程、兒共ト同持テ成シテ令稽古習学セ。遂使剃髮成シ法師ト交ヘテ衆ニ列学場ニ。顕頭ノ諸宗如向カ鏡ニ大小ノ經論似瑩玉ヲ。成俱舍婆娑之碩徳ト仰花嚴三論之明哲ト。終ニ遂ケテ維摩之豎義ヲ得其業更ニ登ニ會之講匠ニ任已講。仙懷已講ト申テ南北ニ京ニ流名ニ施譽ニ名望無カシ之碩学。此人有ル時思出テ、往事ヲ行向ヒ阿井ノ森ニ遍尋問ニ之每一人無シ知レト云者。然間且失本意ハ且哀ハ悲覺覺ヘテ不弁東西ヲ。無ク爲方徘徊シ日漸ク傾ク西山ニ之程。古老一人出來レリ。已講委ウ尋ルニ之ヲ古老申ケルハ、サ様人先年ニハ此處ニ見候。但ソレカ夫婦俱ニ成盲目ト更無懸ケル情ラ之人ニ失渡世ラ之便。當時アノ遙カニ見候山里ニナムトコト傳ヘ承ハリ候ヘト。已講大ニ悦テ侍中童子ナムトヲハ置キ山ノ麓ニ唯我身獨リ隨テ教ヘニ分入テ深山ニ尋ルニ之ニ谷ノ底巖間ニ有一ノ柴ノ庵。秘カニ立寄テ伺フニ之ニ有二人ノ盲目。近付テ聞ケハ物語ニ無クモ疑フ昔ノ我カ親之聲ニ聞ケ、已講是我カ父母ニ覺候ハ僻事ニ候ト。時ニ此ノ二人ノ盲目申様ハ、カウ仰ラルハハハ誰人ニテ御。余時已講云、我是幼少之昔ニ奉テ離レ被捨置カ東大寺ニ今ハ申仙懷已講ト者也。於是盲目ノ云、サル事コソ全ウ不覺候ハ。何カニ申サム哉。如是ハ非人乞丐之身ト争カ已講御房ニ奉申子ヲハ可奉持。努力々々可有候ハスト不承引。余時已講慙ニ語上件ノ子細ニ更取テ父カ手ヲ引キ入シ我カ懷ノ中ニ昔以杖ヲ被シ打テ背カノ疵ヲ令メ探之ヲ語ル我レ生年六歳ニ奉打ラ之往事ヲ時キ。父母共ニ思出昔ノ事ヲ都テ無キ所諍ニ之間、三人合額ニ数刻感歎シク。父母ハ悦テ一子ノ盡メ孝誠之志ノ忝コトヲ流シ泣ク。已講ハ悲責メタル窮餓ニ之事ノ躄ヲ焦ス。於是父母申様ハ我等由テ親子ノ契リ不ルニ断得タリ再ヒ相逢フコト。雖是悦ビ中ノ悦ビト兩眼共ニ盲テ不見我子ノ形ヲ。亦是憂ヘ中ノ憂ト悲シム。ケニモ無極ニ之理。然ルラ此ノ已講諸宗窮ル隙ニ之碩学ニ候。能讀之持行者候。且爲報父母之重恩ヲ。且爲仰ムカ冥衆之感應、終夜奉讀メ法花經ヲ。五夜之哀猿叫ケヒ月ニ聲之山鳥入雲。眞山ノ興ヲ実ニ物サヒシキニ。暁ノ月懸リ梢ニ松ノ風泣

嶺ニ讀誦ノ聲澄ミ巨テ折節柄実ニ貴ク、一ニノ卷モ過キ三四ノ卷畢。本自リ学生ニテ深ク悟ル一乘ノ奧義ヲ之人テ候カハ、彼ノ六根
 淨ノ人依テ一乘ノ法力ニ見ル三千界内外ノ境界ヲ等ノ之經文、銘シテ心府ニ味ハヒ義理、至第六卷法師品、殊ニ致シ信心ヲ偏ニ仰
 法力ニ祈請ス吾カ父母ノ盲目。父母所生眼悉見三千界内外彌樓山須弥及鐵國。此ノ偈文クリカヘシク泣ク數反奉テ讀、
 念珠ヲサラクト摺テ、願法花經中去來現在諸佛世尊平等大會一乘妙典惣テハ靈山虛空ニ一處ニ會發起影向當儀結縁一切
 大衆殊別一乘守護十羅刹女、早ク答テ我孝養ノ志至深重ナルニ立所ニ平喻父母ノ盲目、父母ニハ令見成長之子ノ姿ヲ弟子ニハ
 令メ見ヘト見ヘ一親兩眼之明ナルコトヲ、盡シ肝膽ヲ致サハ祈請、感應不空ニ兩眼忽ニ開ケツ、親子互ニ得テ相見ルコト遂ケ候生前ノ本望。
 是即雖未代澆季ナリト雖凡夫愚昧、孝子トノ抽ツレハ懇切ノ孝誠經王施速疾之利養、凡ソ言モ難述盡シ心モ絶思慮之間、親
 子二人口合額ヲ執手悲泣流涕之外更無カシ他事。思遣候「一候ケメ。遂ニ相ヒ具フ父母ヲ歸東大寺ニ盡ク孝養之誠致水
 寂之勤候。實ニ是知。父ハ有テ遠キ慮ニ示始終立身之道ヲ、母ハ深ク目近哀ヲ濃カニスト眼前撫育ノ情ヲト云事。凡親ノ育ム
 子ノ志皆以如是。即經ノ中ニ父、慈母、悲如山ト説是候。サレハ子トノ孝親ニ之儀、須クシテ盡力ヲ致誠ラト内典
 外典異口同音ニ勵ムルハ是候。

(納富常天「湛齋の唱導資料について」(二)、『鶴見大学紀要』第三十号第四部 人文・社会・自然科学篇、一九九三年三月、
 229～235頁)

この説草は題末詳であるが、内容からすれば、宮崎円遵氏によって紹介された説草「恵心僧都母事」(宮崎円遵「源
 信和尚に関する中世の談義本」(『宗学院論集』第四九号、一九七九年三月)や永井義憲氏によって紹介された説草「院源
 僧正事」(永井義憲「唱導文学史資料考」、『日本仏教文学研究』第一集 豊島書房、一九六六年、改訂版 所収)に通じる、高

僧とその親の恩愛物語で、「仙懷已講事」と題してもよいものであろう。どのような法会で使用されたかを記す覚え書きがなく、納富氏は、(A) 仏事法会関係の「その他」に分類されている。本文にも、「実^ニ是知。父^ハ有^テ遠^キ慮^ニ示^ス始終立身之道^ヲ、母^ハ深^シ目^ヲ近^キ哀^ヲ濃^カニスト。眼^ヲ前^ニ撫^育情^ヲト云事。凡^レ親^ノ育^ム子^ノ之志^皆以^レ如是。即^レ經^ノ中^ニ父^ノ慈^母悲^如山^トト説^クハ是^レ候^トと、父母それぞれ^ノの慈・悲が説かれていたところをみれば、亡父・亡母の追善供養法会において語られていたというよりも、涅槃会や彼岸会のような一般の参拝者が集まる場で語られていたと考えたほうがよいと思われる。(なお、湛齋の唱導資料において、亡親追善供養法会において語られた高僧とその親の恩愛物語を語る説草をみると、物語の後に、法会を営む施主を讃える文言が記されている。)

さて、この説草において信仰の面から注目されるのは、この説草が、高僧とその親の恩愛物語を語りながら、子の親への孝行を強く説き勧めていることである。湛齋の唱導資料にみられる孝思想については、拙著において、納富氏が「追善供養(逆修も含む)に使用したもの」に分類した唱導資料から、亡親追善供養法会が孝思想を基盤として営まれていたことが考えられること(追善供養は亡き親への死後の孝行であり、仏教的観点から追善供養が真の孝行であるとする)、亡親追善供養法会において、親の恩を讃え法会を営む施主の孝を讃える説教において用いられた説草に、高僧とその親の恩愛物語を語る説草があること(「悲母因縁大納言律師」「道瑜伽橋開母盲目事 母志事ノ業王品事」)、を述べた⁽¹²⁾ところが、本説草からは、高僧とその親の恩愛物語が、亡親追善供養法会のみならず一般の参拝者を対象とした法会において、孝思想と密接に関わって説かれていたことがわかるのである。

本説草をみると、仙懷已講は、父親が将来を慮ったこととはいえ、捨てられた子である。しかし、高僧になるにおよんで両親を探し、再会した両親が盲目であることを知ったとき、肝胆を尽くして仏に祈請する。その時唱える台

詞は、「願法花経中去來現在諸佛世尊平等大會一乘妙曲惣^テ靈山虛空二處三會發起影向當儀結縁一切大衆殊別一乘守護
 十羅刹女、早^ク答^テ我^ノ孝^ヲ養^フ志^シ至^テ深^ク重^ク立^所平^諭父母^ノ盲^目、父母^ニ令^見成^長之^子姿^ヲ弟^子令^見二親^ノ兩^ノ眼^之
 明^{ナル}コト^ト」^(マ)というものであり、両親の眼が開いたのは、この仙懷已講の「孝養^ノ志^シ」に仏が感応したからにほかなら
 ない。それゆえ、「雖末代澆季^{ナリト}雖凡夫愚昧^ノ孝^子ト^ト抽^{ツレ}レハ親^ニ之^儀、須^{シト}盡^力ラ致^誠ト内典外典異^ニ同^音勸^ムハ是^候」と語
 と説かれるのである。最後に「サレハ子^ト孝^{スル}親^ニ之^儀、須^{シト}盡^力ラ致^誠ト内典外典異^ニ同^音勸^ムハ是^候」と語
 り収めていることから、この説草が、仙懷已講とその親の恩愛物語によって聴衆の涙を誘い、聴衆の心に孝の念を
 染み込ませるように説き聞かせるものであったことがうかがわれる。⁽¹³⁾このように、中世において、孝思想は、唱導の
 説教の場を通して、深く人々の信仰や生活思想の中に浸透していったと思われるのである。

また、文学や芸能の面から注目されるのは、本説草の内容が、説話集や法華経の注釈書、さらには謡曲の中にみる
 ことができる、高僧とその親との恩愛物語と類似していることである。本説草では、父親が我が子の将来を考えて杖
 で打ち据え、後に再会した際に、その疵が親子の証となるという内容であるが、説話集や謡曲にみえる、いわゆる
 「弓継」の物語と類似すると考えることができるのではないか。いわゆる「弓継」の物語について知られているのは、
 『三國伝記』巻七第十八「天台座主延昌僧正事」である。加賀国の白山八院で修学していた千代鶴丸は、故郷の父母
 を恋しく思い密かに家を訪れるが、父親は持っていた弓が三つに折れるほど散々に打擲して追い返す。親を恨んで彷徨
 っていた千代鶴丸は比叡山の註記と出会い、註記に連れられて比叡山に登って出家し、ついには天台座主にまでな
 る。年老いた父は、夢の告げによって我が子が天台座主になったことを察し、折れた弓を首に懸けて訪ねて行き再会
 する。この『三國伝記』の延昌僧正の説話については、阿部泰郎氏によって、『内外因縁集』や能『弓継物語』、室町

物語『弓継』など、語り物や芸能に連なるものであることが論じられている⁽¹⁴⁾。また、阿部氏は、『法華経』の直談である『直談因縁集』七 四一、妙音品「弓継事」が殆ど同巧であることを指摘し、『直談因縁集』には、「唱導の場である際に流通したであろう物語」が幾つも見れ込んでいることを述べている⁽¹⁵⁾。父親が我が子の将来を考えて杖で打ち据える点、また、後に高僧となった子と親が再会する点において、本説草は「弓継」の物語に類似するものと思われる。ただし、直接的影響というのではなく、阿部氏が言われるような、「唱導の場で実際に流通したであろう」類似の物語の一つではなかったかと考えられるのである。湛齋の唱導資料をみていくと、高僧と親との恩愛物語が、実際の唱導の場で様々なバリエーションをもって語られていたことがうかがわれる。高僧と親との恩愛物語は、そのような唱導の場を経ることによって物語が練られ、やがては芸能の世界へ取り入れられていったであろうことが推測されるのである。

まとめ

以上、湛齋の唱導資料における説草の中、涅槃会、彼岸会、その他の法会において使用された説草について、信仰と文学の観点から考察した。亡親追善供養法会に使用された説草と同様、涅槃会、彼岸会、あるいはその他の法会においても、親子の恩愛物語は重要なテーマとして語られていた。そのことから、仏教においては、日常生活における信仰として孝が重要視されていたこと、また、親子の恩愛物語が、信仰を勧めるための話としてではなく、感動を催す話として多くの聴衆に好まれたテーマであったことが考えられたのである。そして、唱導の場で多くの聴衆の

涙を誘った親子の恩愛物語は、説話集に収録され、さらには能「弓継物狂」などの芸能のテーマにも影響していったものと考えられるのである。このことは、亡親追善供養法会に使用された説草を併せ考えていくと、より明確になると思われる。

湛睿の唱導資料の中、亡親追善供養法会に使用された説草には、「悲母因縁大納言神師」、「道瑜伽橋開母盲目事母志事」藥王品事という、高僧とその母との恩愛物語が含まれている。「悲母因縁大納言神師」は、「大納言の愛妾であった女性が
大納言亡き後、貧しさから我が子を捨て、捨てられた子は三井寺の僧に拾われて高僧となり、母を訪ねて遊行する。
一方、母は我が子の行く末を案じて泣き暮らしているうち、両目を泣きつぶして盲目となり、非人乞食の身となって
天王寺の西門の傍らに居て念仏を唱えて日を送るようになる。図らずも天王寺を訪れた子と母は再会し、ともに三井
寺へ行き、母は高僧となった子の加持祈禱によって眼が開く」という物語である。また、「道瑜伽橋開母盲目事母志事
藥王品事」は、「播磨国の賤家の女性が、我が子の将来を案じ、自らの身を売って、我が子を比叡山に登らせる支度を
整え、子を比叡山に登らせる。子は学問に励む日々を送るが、母は子の行く末が気にかかり、泣き暮らしているうち
に両目を泣きつぶして盲目となり、仕えていた屋敷から暇を出され、ついに道端で物乞いをして命をつなぐようになっ
てしまふ。ある時、比叡山の僧が通りかかり、乞食の身の上話を聞き、同学の僧に聞いた話と違わないことから、比
叡山に戻って同学の僧（道瑜）にそのことを伝える。道瑜は急ぎ駆けつけ、盲目となった母と再会する。道瑜が『法
華経』「藥王品」を誦し祈請すると、忽ち天童が下ってきて母の眼に触れ母の眼が開く。それを見て感歎した人々が
話を伝え、ついには帝の叡聞に達し、紫衣を賜り、道瑜は母への孝行を尽くす」という物語である。湛睿の唱導資料
における、親子の恩愛物語、特に高僧とその親との恩愛物語を語る説草をみていくと、高僧とその親との恩愛物語と

いうテーマが、法会の唱導の場において、様々なバリエーションをもって繰り返して語られていたことがうかがわれる。また、高僧と母との恩愛物語には、母が困窮の末、子の将来を思うがゆえに手放して（捨てる、僧にするなど）母子が別離し、子は高僧となり、母は盲目となって落ちぶれ、後に母子が再会し、子の祈りによって母の眼が開く、というパターンがあったことがうかがわれるのである。

説教師たちは、唱導の場を通して、どのような物語が人々の心を捉え感動させるか知悉していったことであろう。寺院において毎年催された涅槃会や彼岸会、また、多くの人々が言んだ亡親追善供養法会など、数知れない法会の場において、人々を泣かせ、感動させる物語が語られていたのである。そのような人々の心の琴線に触れる物語について、中世の芸能者たちが無関心であったとは思えない。

大谷節子氏は、物狂能の構想の類型を甲之二群に分類し、甲群を「別離の悲しみから物狂となったシテが再会の場となる所へ尋ねていく構想のもの」として、このような物狂能は「幼い子と親の別離再会譚を骨格としている」ことを指摘し、『三国伝記』巻七第十八「天台座主延昌僧正事」に代表される、「弓継」説話と「丹後物狂」を比較して、「弓継」説話に語られる「打擲追放出世再会型とでもいうべき高僧伝」は、物狂能甲群の構想の淵源となっていることを論じている。⁽¹⁶⁾ また、「嵯峨物狂」（「百万」の祖型となった観阿弥作の曲。現存しないため具体的な内容は不明）について、細川涼一氏が、叡尊門下の律僧円覚上人導御（一一三三―一三一一）の伝記研究を基に、「嵯峨物狂」の成立を推測した論⁽¹⁷⁾（法金剛院蔵『法金剛院古今伝記』、大覚寺蔵享祿二年 一五二九 写『嵯峨清涼寺地藏院縁起』に記される導御の伝記、すなわち、「導御は、父の死後、母が困窮の末にやむなく手放した捨て子であり、寺に拾われ律僧となり、聖徳太子の夢告によって、衆生済度と生き別れた母に再会することを祈念して、清涼寺・壬生寺や法金剛院において融通大念仏会を興行し、また、愛宕

山に登って母との再会を地蔵菩薩に祈念し、後に、異僧の告げによって播磨国印南野で母と再会する」という導御の奇跡物語を觀阿弥が能に仕立てたものではないか、とする）をふまえて、「嵯峨物狂」は、高僧となつた子が導師となっている法会に子を探して狂乱した体の母が結縁に訪れるという、甲群の一類型を為す構想の物狂能であつたのではないかと述べている。そして、「その出所が法会と共にあつた能もまた、譬喩因縁の教化にその淵源が求められることは、極めて有り得べき見取り図」であり、「少なくとも物狂能に関しては」、「その淵源を唱導資料に求めることが可能である」と論じている。

湛睿の唱導資料にみる説草には、使用した年月が覚え書きとして記されており、「悲母因縁大納言禪師」は康永四年（一三四五）に使用されたものであり、また、「道瑜法橋開母盲目事母志事／薬王品事」は元亨二年（一三三二）、建武五年（一三三八）、康永二年（一三四三）、貞和三年（一三四七）に使用されたものであることが確認できる。説草「悲母因縁大納言禪師」、「道瑜法橋開母盲目事母志事／薬王品事」が、物語の構成において物狂能と類似していることをみると、鎌倉末期から南北朝における法会の場合においてしばしば語られていた高僧とその母との恩愛物語が、物狂能の構想に大きな影響を与えていたのではなかったか、と考えられるのである。

注

- (1) 永井義憲氏『日本仏教文学』（塙書房、一九六三年）
 (2) 岡見正雄氏「唱導師と説話」（『日本古典文学大系第一期月報』9、一九六四年二月）「小さな説話本 寺庵の文学・桃華因縁」、『国語と国文学』、一九七七年五月。ともに同氏著『室町文学の世界 面白の花の都や』所収、岩波書店、一九九六年）
 (3) 岡見正雄氏「説教と説話 多田満仲・鹿野苑物語・有信卿女事」（『仏教芸術』54、一九六四年五月）、同氏「小さな説話本

- 寺庵の文学・桃華因縁」(『国語と国文学』、一九七七五月)、永井義憲氏「唱導文学史資料考イ 金沢文庫蔵『院源僧正事』」(『日本仏教文学研究』第一集所収 豊島書房、一九六六年、改訂版)、宮崎円遵氏「源信和尚に関する中世の談義本」(『宗学院論集』第四九号、一九七九年三月)、黒田彰氏「専想寺蔵 女人往生問書 大唐平州男女因縁 恵心僧都事 影印」(『愛知県立大学文学部論集』三七号、一九八九年二月)、山本秀人・宇都宮啓吾氏「唐招提寺片仮名文説話三種 影印・翻刻並に解説」「取鷹俗母縁」「役行者悲母事」「桃華因縁」(『鎌倉時代語研究』第二十一輯、武蔵野書院、一九九八年五月)、木村明子氏「金沢文庫本『楊威免虎害事』・『張敷留扇事』」(『佛教大学大学院紀要』第三三号、二〇〇四年三月)など。
- (4) 納富常天氏「湛睿の唱導資料について」(一)～(四)、『鶴見大学紀要』第二九～三三号、二〇〇四年三月)など。
- (5) 納富常天氏「湛睿の研究」(同氏「金沢文庫資料の研究」所収、法蔵館、一九八二年六月)、同氏「湛睿の事績」(『駒澤大学仏教学部論集』三七号、一九八九年二月)
- (6) 納富常天氏「湛睿の唱導資料について」(一)、『鶴見大学紀要』第二九号 第四部 人文・社会・自然科学篇、一九九二年三月)
- (7) 拙著『孝思想の受容と古代中世文学』(新典社、二〇〇七年二月)
- (8) 黒田彰氏「孝行集と『道安仕母事』」(『国文学』関西大学 七十八号、一九九九年三月)
- (9) 黒田彰氏「三国伝記と恵心僧都物語 説草から説話集へ」(『説林』37、一九八九年二月)
- (10) 永井義憲氏「日本仏教文学研究」第一集(豊島書房、一九六六年、改訂版)
- (11) 参考のため、『蒙求』一三三「陵母伏劔」の古注(國立故宮博物院蔵上巻古鈔本)を次に掲げる。
 烈女傳曰王陵母者陵聚黨數千人以兵屬漢項王州使捕陵母置軍中使々招陵々母私送使者泣曰為妾曰語陵善事漢々王々長者必得天下无レ以老妾懷二乃伏劔死以固勉陵
- (池田利夫編『蒙求古注集成』上巻、汲古書院、一九八八年一月)
- (12) 注(7)に同じ。
- (13) 二〇〇七年七月三日、築地本願寺で開催された節談説教布教大会において、廣陵兼純師の説教を拝聴した。阿弥陀仏の本願を説く説教は、笑いあり涙ありのそれは見事な説教であった。その説教の中で語られた、伊勢湾台風によって母を亡くした孤

児と亡き母との物語は、聴衆の涙を誘い、多くの人々がハンカチで目許を拭っていた。説教とは、このように、情念の世界に訴えながら人々を信仰へと導くものであり、説教を聴聞することによって心にわき起こってくる宗教的感動が人々の信仰心を形成していったのではないかということ強く感じた。

- (14) 阿部泰郎氏「唱導」『唱導説話考』(説話の講座3 『説話の場 唱導・注釈』、勉誠社、一九九三年二月)
- (15) 阿部泰郎氏『日光天海蔵直談因縁集翻刻と索引』解題(和泉書院、一九九八年一〇月)
- (16) 大谷節子氏『世阿弥の中世』(岩波書店、二〇〇七年三月)
- (17) 細川涼一氏『導御・嵯峨清涼寺融通大念仏会・「百万」』(『文学』、一九八六年三月)

(たなか・のりさだ/本学教授)